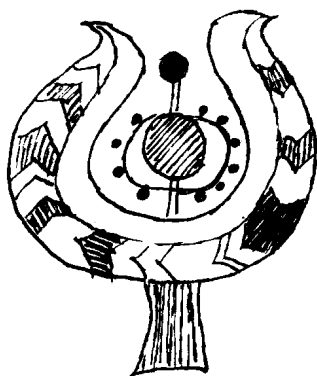


蝶花嬉遊図

田辺聖子

蝶花嬉遊図

田辺聖子



蝶花嬉遊図

980円

著者 田辺聖子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21

〒112 振替 東京 8-3930

電話 東京(03)945-1111(大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

第一刷発行 昭和55年4月25日



0093-306786-2253(0) (文2)

©Seiko Tanabe 1980

蝶花嬉遊図

装 幀
オクダトシエ
さし絵
こうのこのみ



昨日、一日じゅう外へ出ていたので、その疲れもあったのか、ぐっすり眠っていて、それは明け方までつづいた。

明け方に、鮮明な夢を見た。サクランボが大木にたわわに稔っていて、そこへ陽が当たって何ともきれいだっただ。ヨソの家の庭、という感じである。私は木戸を開けてはいり

「分けて頂けませんか」

と呼ばわったら、よく分らないが女性のような感じで

「お望みなら」

というような答えがあった。土間は何となく土俗的な西洋料理屋といった感じで、美しい紫いろのワインの瓶がいくつも並んでいた。

ワインが紫色というより、瓶の色が紫色、という風に思えた。私は欲しくてたま

らなくなり、ついでにそれを指して、

「空いたらもらえませんか？」

と頼んでいた。

人にねだってばかりいる夢だと、目がさめておかしくなった。私は明け方、よくハッキリした夢を見るので興味をもち「夢帳」と名付けたノートに、夢の話を書くことがある。これも書きとめようと思った。

空はハチミツ色に明るんでいて、いい天気らしかった。レオが顔を洗っているらしい水音がきこえる。

彼は、朝はそうじて不機嫌である。

健康な男だから寝起きはいいのだが、そして、昔ニンゲンだから仕事にいくのは嫌いではないのだが、何しろこれから十時間、私から離れないといけないので。

夕方まで私と別れないといけないので。

仲よくすると、よけい、別れがつらくなるといわんばかりに、気むずかしくしている。

朝はほとんど食べない。熱いミルクコーヒー（彼は、決して、カフェオレなどといわない。ときどき、しゃれて、『ミーコー』と呼ぶ。私や彼が好きな神戸の下町

の喫茶店で『ミーコー一つ!』と呼ばわっていたからである) いっぱい、時によつてはトースト半枚、ぐらいでそそくさと出ていく。

ガレージの戸を開ける音が、やけくそみたいにひびくことがある。
(くそッ、畜生!)

という感じで、車が引き出される。(古ぼけたセドリックの白)

上衣をうしろのシートに投げつけ、ふくれつつらで、レオは出ていくのである。そうして、車を出して、あとまた下りて、ガレージの戸を閉める、ということはないのである。これは私がする。

「いってらっしゃい」

という

「うー」

とも

「ムム」

ともつかないうめき声を洩らして出ていってしまう。私の顔なんか見もしない。そうやって必死に私との別れに体を慣らそう、としてるみたい。

これが休日で、どこへも出なくてもいい日となるとたいへんだ。(昨日がそうだ

った)

朝、目がさめてしばらく寢床でゆっくりして、(そのとき、私はうつらうつらしながら、「夢帳」を書いたりしている)彼はしばし「休日」のうれしさを味わっているみたい。

「どこへも出なくてええなんて、夢みたいやなあ」

といい、私のあたまを引き寄せる。こうすると私はスボッと、まことに具合よくうまく彼の腕の中にはいる。あんまり具合よすぎてまた、うつらうつらと睡ってしまうこともあるし、その睡りが伝染して彼もいつか、ぐっすり、一度寝したりする。そんなとき、眼がさめると、ほんとうにみずみずしい体力のよみがえりを感じるのだった。それからまた、夢の話なんかしていて、

「ワニがさ、縫いぐるみになってたの、ぽんとぬぐと、中からあらわれたのは、竹ちゃんだった」

と私は説明したりする。竹ちゃんというのは私たちの共通の友人の、竹田収おさむのことである。

「それは、アンタが竹ちゃんに欲望を感じてるせいや。ワニの形というのは男性そのものなんです」

と勿体ぶって彼は教える。

「へーん。じゃ、もしレオが川から流れてきた桃太郎の夢を見て、桃を二つに割って出てきたのが、ミドやったら、あんた、ミドに欲望を感じてるってわけ？」

と私はいつてやる。ミドというのは、これも私たちの友達の、植田ミドリのことである。

「そういうことになりますなあ」

レオは澄ましていた。彼がミドちゃんことミドリに惚れ、私が竹ちゃんこと竹田収に惚れているという設定は、いつも私たちの仲のたのしさに弾力を与える、お気に入りのお話だった。

「すべて、夢判断なんてのは、自分の潜在的欲望から類推^{るいすい}することが多いのね」

と私はいつてやる。レオはいやな顔をする。彼はむつかしそうな漢語（もしくはそれを使う女）がきらいである。英語そのほかの外国語も同様である。彼は、コトバというものはわかりやすく、かみくだいて、平仮名で書くことのできる、みんなが知り、誰でも使っているコトバが、いちばん最高で、いちばん上品だといっている。

小説でも新聞雑誌の記事でも論文でも、大学での講義でも、国会での演説でも、

そうあるべきものだ、という彼の持論である。何より、

「……的」

というコトバがきらいなのだそうだ。それで私がワザとそういうと、

「批評家みたいなこと、いうなよ」

というのである。

「あら、批評は必要よ。批評があるから、物は存在を獲得するのよ」

「うるさい！」

レオは私の口を大きな掌でふさいだ。

私だったら

（批評は必要だが、批評家は必要じゃない！）

とでもいうのにな。そう、レオに教えてやりたいところであるが、レオはすぐ「うるさい」になってしまふ。漢語熟語、ともかくへりくつが絶対きらい、「うるさい」といっているうちに揉み合って、

「きゃっ、きゃっ」

といっているうちに誘われて、ゆっくりした気分で「寝る」こともあったりして、ともかく、休日の朝は、だらしなく楽しく幕が開くわけである。

食事がたいへんだ。卵に生^{なま}ハム、レモンとハチミツ入りのミルク、挽いたコーヒー、メロンなんかをたっぷり採る。パーコレーターに湯気の粒々がたまつて、いい匂いがみちみちて、外はお天気、なんてとき、私はあんまり幸福で放心してしまうことがある。

日曜は電話も鳴らない。——私はその程度に押えられる、仕事の量しか、持たない。昔は正月の一日から大晦日まで、のべつ幕なしに電話が鳴りづめだった。私はラジオやテレビのライターをしていて、何でも狂気のように引き受けていたから。いっぺん、二ヵ月ほど病気をしたのと、そのあと、レオと暮らすようになったので、仕事はそれまでの十分の一に減らしてしまった。

昔は減らすことを怖がっていた。

でも、私が引き受けなくても、この世では、誰かが代って引き受けてくれ、ちゃんと物ごとは破綻なく、何とか恰好ついているのだ。

私でなくても、しかるべき人が代りに、しかるべく仕事をしている。

どうということ、ないのだ。それが分った。

レオもそういつている。彼は今では仕事の大半の実権を、実弟に譲ってしまった。いまでも運輸会社の代表にはなっているけれど、昔のように何から何までやって

いないそうである。五十ぐらいで、そんなこというてたらあかんなあ、と「芦屋」の人にいわれて、「五十やから、そうするねん」と言い返したそうである。

「芦屋」は彼の本宅のあるところで、私とレオは、本宅の人々のことをひとからげに、

「芦屋」

といていた。芦屋には彼の妻や、大学生の娘、大学を卒業したか、しないかの息子、それに、彼の義母だとか、未婚でもう四十四、五になった義妹なんがいる。彼の妻は歯科医で、自宅の一階を歯科医院にしていた。

娘が医学部へ入ったので、彼の妻は娘をあとつぎにしようと思っているそうである。

来年は大改造して、鉄筋三階建の歯科医院になるのだそうだ。

「おそろして、なあ」

とレオはいつている。

「ウチのオナゴらの話、聞いてたら」

レオは無邪気に目をぱちくりしているので、私は、彼の芦屋の妻たちが好きになるくらいだった。

妻の母も歯科医であって、父もそうなのであった。

妻の一族はほとんど医者だそうである。

レオは、娘を医者にはさせたくなかったのであるが、

「家業ですから」

と、妻の母が凜然と主張し、そうすると、おとなしいレオはもう何もいえない、
「さよか」

と黙ってしまい、また娘が、息子とは段ちがいによくできて、さっさと、金の要らない国立大の医学部に入ったそうである。

レオ、というのは、むろんというか、私たち二人の間の呼び名で、本当は、志賀稀雄という名前である。昔、私は彼と知り合ったころ、「志賀さん」と呼んでいた
ので、いつまでも、（同棲するようになってからでも）長いこと「志賀さん」と
っていた。

「志賀さんご飯だよ」

なんて、いていた。しかしいつとなく、「マレオさん」から「レオ」になって
しまった。ときどき「レオポン」になったり、するけれども。

私のほうは、「浅野モリ」という名前は、いつもあまり使われることはない。た

いてい二人きりのときはそばを離れないので、彼が私を呼びたてる機会はないわけである。

一緒に暮らして三年になるから、私は、三十三になるわけだ。レオの離婚話は、はじめのうちは出ていたけれども、このごろはあまり、出ない。

毎日の暮らしがたのしいので、そんな話をしている時間も勿体ないのだ。とくに、一日一緒にいられる休みの日なんか。

そんな話よりも、私たちはもっと面白いことをたくさん知っていた。六甲山へ車で上って、レオが入っている、六甲カントリーの小屋で熱いコーヒーを飲みながらひと息入れたり。ここは外人のひらいた、日本で一ばん古いゴルフ場なので、食堂の壁には、その昔、山駕籠で上ったゴルフヤーの写真なんか掲げてある。

関西の財閥のお嬢さんや奥さんがグループできていたりする。建物は古風なヨーロッパの田舎家ふうの、じっくりしたものである。

銀行の頭取の一家が来ていたりして、新聞で見る顔もたくさんあった。しかしレオは、ここではもうゴルフをすることもなくなった。私がゴルフをしないからである。

六甲の牧場横から、森林植物園へ抜け、更に西へ走っていったり、(時々、私が



運転を交代した）ススキの高原で車をとめ、持っていた魔法瓶で、紅茶を飲んだりした。どっちも胸当てのついたジーンズをはいて、セーターを着て、そして来る途中、町で見た広告の、「ピーター・パン粉」という粉屋の広告と、「バイタリ亭」という飲み屋の広告と、どっちがうまくできてるかという優劣を論じ合ったりするのだった。

ススキの中にうずくまってるかと全く、小さい私はすっぱり隠れてしまつて

「モリ！」

と、不安をあらわにしてレオが呼ぶくらいである。

「オシッコしてたんだ」

「マムシにやられるぞ。ツチノコもいるかもしれん」

「竹ちゃんのワニかもしれないね」

「そういえば竹ちゃんにも長いこと、会わへんなあ」

「呼ぼうか、今晚」

「今晚でなくてもええ」

休日の晩は、たっぷり時間があり、それがたのしみだった。毎晩のように、私はレオと死後のことを話す。肉をあぶってタレにつけては食べる、ちょっとジンギス